今日も「自分の命は自分で守る」

これもトラウマでしょうか。毎朝私はもち場に立つと、清水木の暮方面からやってくる生徒たちの姿を探してしまいます。そして、遠く彼方に生徒の姿をみつけると、ほっと安心します。南側から登ってくる生徒にはそういう感情は生まれません。ごめんね、差別しているわけではないのですよ。今思い出すだけでぞっとする出来事が、過去にあったからです。

今から二十五、六年前です。中央道北側の道沿いには、今ほど家が建っていませんでしたし、そこを通る車も今よりはるかに少なかったと記憶しています。朝の七時過ぎに、送迎や出勤で利用する車はほとんどありません。そんな中を当時の生徒たちは通学していました。

奥名から自転車で通学していた私の学級の女子生徒がそこを通っていた時、待ち伏せしていた男性に呼び止められました。そして、刃渡り約三十センチ近くあるサバイバルナイフを突きつけられ、車に乗るように言われたのです。

陸上部に所属し、リーダー的な存在の彼女でしたが、いきなり見知らぬ男性にナイフを突きつけられときは、さぞや怖かったことでしょう。しかし、彼女はすきを見て走って逃げました。陸上をやっていたことが、自身の身を守ったのかもしれません。

頭の中はパニックだったのでしょう。家は少ないといっても、全くないわけではありません。そこに逃げ込むこともできたのに、彼女は必死に学校まで走ってきました。そして、職員室に駆け込むと腰が抜けて立てなくなってしまいました。

警察にすぐに連絡して現場に駆けつけてもらいましたが、男性の姿はもちろんありません。「帰りも（男性が）現場に来るかもしれないので、生徒を通さないように」という警察の指示で、下校時は生徒を違うルートで帰らせました。警察の言う通り、下校時にも男性は現場にやってきました。そして、張り込んでいた警察官が男性の身柄を確保しました。

その時に彼女の身に何かあったらと考えると、今でも恐ろしくなります。そういうことがあったから、毎日当たり前のようにその道を通って生徒たちがやってくると、私の中にほっとする感覚が生まれるようになったのだと思います。

今ではその辺りにも、多くの家が建っています。送迎や通勤の車も多く通るようになりました。ウォーキングや新聞配達をしている方も見られます。過去と比べてずいぶん安全になったようです。

でも、油断は禁物。「いつも通る道だから」という心の隙間（すきま）に危険は潜んでいるかもしれませんからね。やはり、今日も「自分の命は自分で守る」です。（十一月十八日　記）